熊本支援チーム 2020年7月熊本豪雨災害の活動記録

omoi

Disaster Support Report

コロナ禍における
新しい災害支援のカタチ



一般社団法人熊本支援チーム

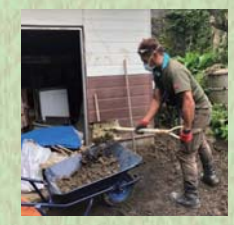
発行：一般社団法人熊本支援チーム　　発行日：2022年7月















表紙絵／松永健志

目 次

3　東日本大震災の活動紹介

5　熊本地震の活動紹介

9　代表理事あいさつ

10　団体概要

11　2020年7月熊本豪雨災害について

13　熊本支援チーム組織図

15　新しい支援のカタチ

27　これまでの活動

35　被災地の協力者／被災地での拠点づくり

41　広がる支援の輪

48　TOPICS 受賞歴

49　報道記録

53　未来に向けて

57　支援金・講演・勉強会・スタディーツアーの受付

58　最後に

東日本大震災の活動紹介

2011年3月11日、東北関東地方で東日本大震災が発生しました。
「東北の人たちを助けたい」
その想いを胸に、熊本で、民間から、たくさんの有志が集結。
東日本大震災・熊本支援チームを立ち上げ、
支援物資を集めて被災地へ届けるなど、さまざまな活動を行ってきました。

2011年

3月11日　14時46分
東日本大震災 発生

3月16日
●熊本市近郊を中心に有志約40人が集結
東日本大震災・熊本支援チームが誕生
●支援物資集めを始める

3月20日
●4日間で支援物資20tが集まる
約200名のボランティアが協力（場所：宇土市役所）

3月21日
●トラックへの支援物資積み込み作業を実施
約60名のボランティアが協力（場所：宇土市役所）

3月22日
●支援物資20tを載せたトラックが熊本を出発
（場所：宇土市役所）

3月23日
●被災地へ支援物資が到着
宮城県仙台市、福島県相馬市、宮城県石巻市などの被災地へ支援物資を届ける。
その際、熊本から現地へ向かった活動スタッフを中心に、行政や自衛隊などの支援が
行き届いていない地域や避難所へ物資の配達・支援も精力的に行う

支援物資の内容

◎米　2.5t
◎飲料水（その他飲料含む）　4.7t
◎毛布　143袋
◎衣類　段ボール315箱
◎食料品　段ボール80箱
◎赤ちゃん用食品　段ボール28箱
◎マスク　段ボール4箱
◎カイロ　段ボール23箱
◎乾電池　段ボール3箱
◎ゴム手袋　段ボール1箱
◎コンロ&ボンベ　段ボール3箱
◎石鹸　段ボール30箱
◎おむつ　段ボール150箱
◎生理用品　段ボール150箱
◎カップめん　段ボール180箱
◎子ども用おしりふき　段ボール40箱
◎大人用おむつ　段ボール70箱
◎トイレットペーパー　段ボール200箱
◎タオル　段ボール30箱
◎歯ブラシ　段ボール2箱
◎ボックスティッシュ　段ボール10箱
◎ウエットティッシュ　段ボール14箱
◎その他生活用品色々　段ボール2箱


東北への派遣チーム


東北での支援活動の様子

4月4日
●支援物資12tを載せたトラックが熊本を出発
（場所：宇土市役所）

支援物資の内容

◎食料品
◎携帯用歯ブラシセット
◎ヒゲソリ（T字型）
◎下着（肌着、パンツ、靴下）
◎おむつ（子供用・大人用それぞれ可）
◎雨合羽・レインコート

2012年

3月11日
慰霊祭に竹あかり提供

11月6日
●情報交換会・定期報告会を開催
未曾有の大惨事を忘れないために、そして熊本の災害について考えるために、定期報告会並びに意見交換会を開催。
東北地方の状況や県内での支援の動きの現状を共有すると共に、2012年夏に熊本で起こった白川氾濫での水害
などの支援の動きなどについても情報・意見交換を実施（場所：熊本市）

2013年

3月11日
慰霊祭に竹あかり提供

6月12日
●情報交換会・定期報告会を開催
東北地方の状況や県内での支援の動きの現状を共有（場所：熊本市）

2014年

3月11日
慰霊祭に竹あかり提供

5月26日
●情報交換会・定期報告会を開催
東北地方の状況や県内での支援の動きの現状を共有（場所：熊本市）

2015年

3月11日
慰霊祭に竹あかり提供

5月18日
●情報交換会・定期報告会を開催
東北地方の状況や県内での支援の動きの現状を共有（場所：熊本市）

2016年

3月11日
慰霊祭に竹あかり提供

















熊本地震の活動紹介

東日本大震災から5年後の2016年4月14日・16日。
最大震度7を2回記録する直下型の大地震が、私たちの地元・熊本で起こりました。
熊本地震発生直後から支援活動をスタート。
迅速かつ分かりやすい支援活動のために
チーム名を「熊本地震・熊本支援チーム」に変え、幅広い活動を展開しました。





2016年
- 4月14日　21時26分
  熊本地震 前震発生
- 4月15日
  ●対策会議を実施
  同時に物資提供もスタート（～8月15日まで）
  ●クラウドファンディング「CAMPFIRE」で支援金募集を開始
- 4月16日　1時25分
  熊本地震 本震発生
  ●「健軍ベース」（熊本市東区）開設
  ●「筑後物資ベース」（福岡県筑後市）開設
- 4月16日
  ●東日本大震災・熊本支援チームから熊本地震・熊本支援チームへ名称変更
  熊本の支援活動を開始
  ●NPO法人MAKE THE HEAVEN（メイク・ザ・ヘブン）の
  救援・復興支援チーム**め組JAPAN**が合流
- 4月24日
  ●若葉小学校サポート開始（～8月26日まで）
- 4月28日
  ●夢枕プロジェクト開始
- 5月1日
  ●ガテン系作業開始
  6月20日～8月15日の期間は水害対応の活動も実施
  ●熊本市との物資提供連携開始
- 5月3日
  ●チーム熊本発足
  ●「崇城大学ボランティアビレッジ」開設
  ●炊き出し開始（～8月25日まで）
- 5月6日
  ●チーム熊本を一般社団法人化
- 5月10日
  ●プロジェクト「BRIDGE KUMAMOTO」開始
- 5月15日
  ●イベント「熊本の明日を考えるトークセッション」開催
- 2016年 6月2日
  ●引っ越しサポート開始
- 6月4日
  ●「くまモンカフェ@避難所」を開始
- 6月9日
  ●プロジェクト「WINg kumamoto」開始
- 6月15日
  ●プロジェクト「anone」開始
- 6月16日
  ●イベント「GAMADAS 00」開催

め組JAPAN とは

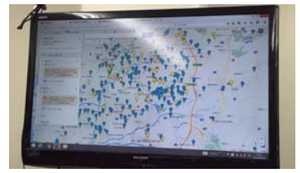
NPO法人MAKE THE HEAVEN（メイク・ザ・ヘブン）の救援・復興支援チーム。MAKE THE HEAVENでは、2010年までに3回の復興支援を行っている（アフガニスタン戦争復興支援・イラン大震災復興支援・新潟中越沖震災緊急支援）。災害が起きた時に、仲間が集い、動き、希望や笑顔を大きくするために出動するチームが「め組」。東日本大震災では、被災者への救援活動、被災地の復興活動を全面的にサポートしていくことを決め、東日本大震災直後からめ組JAPANというチーム名で出動し、現在も活動を継続中。熊本地震直後も、熊本支援チームと協力して活動を開始。

- 6月20日
  ●「崇城大学ボランティアビレッジ」が水害で被災
  ●「UP!Field」開始（～10月15日まで）
- 6月23日
  ●ビレッジ近隣住民交流会を開催
- 7月28日
  ●「くまモンカフェ@仮設住宅」開始
- 8月25日
  ●ペットシェルターサポートを開始
- 8月26日
  ●若葉小学校サポート終了（若葉小避難所閉鎖）
  ●仮設住宅におけるニーズの調査を開始
- 9月8日
  ●北海道へ水害支援物資を発送
- 9月24日
  ●イベント「アカリトライブ」開催
- 10月8・9日
  ●イベント「熊本暮らし人まつり みずあかり」へ参加
- 10月16日
  ●「崇城大学ボランティアビレッジ」終了
- 11月1日
  ●ボランティアビレッジ第2弾「南区ベース」開設
- 2017年 1月31日
  ●ボランティアビレッジ第2弾「南区ベース」終了
  ●め組JAPAN活動終了

























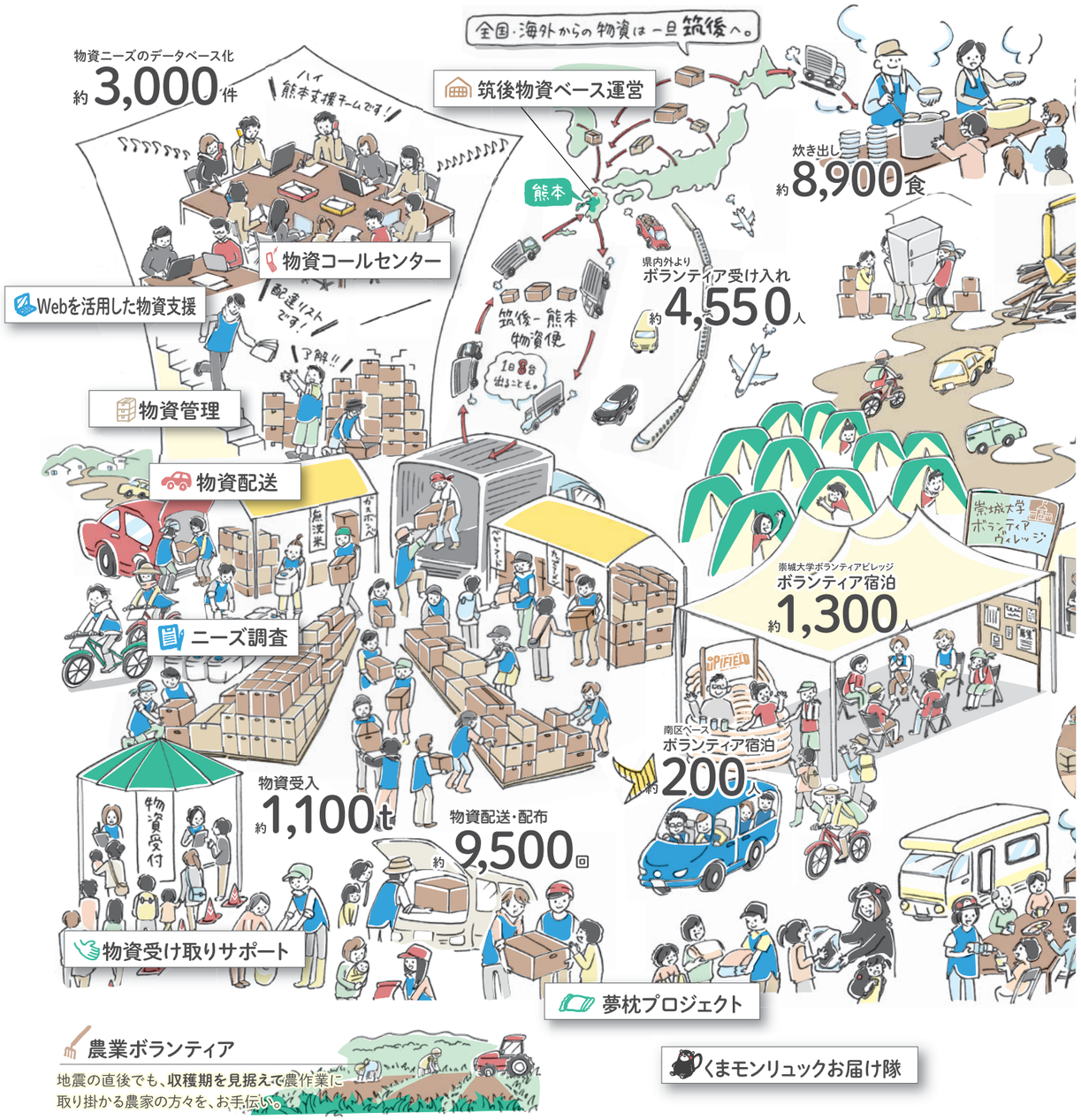






熊本地震支援活動の概要

私たちは全国から集まったボランティアの方々と一緒に、多角的に支援活動を展開してきました。その概要をご紹介します。　掲載内容は2017年3月31日現在



物資支援

全国からの支援物資を避難所（被災者）へ必要な物を必要な分だけ届ける。



熊本地震が発生し、震源地付近のスーパーやコンビニ、飲食店などは大きな被害を受け、営業中止に。そこで「県民の生命の維持」を第一に考え、全国から支援物資を募り、物資提供を始めることにした。

情報収集・データベース化

物資支援のためのコールセンターを設置。ローラー作戦によるニーズ調査と情報のデータベース化を行う。



物資支援を行う中、現場では業務過多による混乱が起きていた。電話での支援依頼から配送完了まで、担当者はたった1人。そのため、情報の把握や蓄積ができていなかった。支援活動に大事なのはスピード。混乱を解決するために対応マニュアルを作り、データを保管するシステムと運用手順も作成した。

ガテン

倒壊した家屋から家財道具などを取り出し、瓦礫の撤去作業などを実施。水害発生時は、家屋の泥のかき出しや片付けも。



全国から、たくさんのボランティアが熊本のために活動しに来てくれているのを見て、熊本で暮らす私も触発された。こんな時だからできること、このタイミングで今の自分にできることをやろうと決心した。

支援活動マッチング・被災地案内・講演

全国と地元熊本のネットワークをフル活用し、支援者と被災者や活動団体を繋ぎ、「Win-Win」の関係を構築。



熊本地震直後、全国の仲間から「このような支援ができるが、必要とする人を紹介してほしい」「この団体を紹介してほしい」などの依頼が多数あった。「善意」が全国からしっかりと熊本へ届くように、熊本のネットワークをフルに活かし、人と人を繋ぎたいと考えた。

引っ越し

避難所・被災家屋（軒先避難）から仮設住宅・みなし仮設への引っ越しのサポートを行う。



被災当初は、瓦礫の撤去や道路整備、避難所の運営、物資の配送で忙しく、被災者が引っ越しの準備を整えても、引っ越しのサポートが出来なかった。その後、1日でも早く避難生活から新生活へ移行するための支援をしたいと思い、活動を開始。

避難所・若葉小学校支援

若葉小学校の避難所運営のサポート。物資支援、避難者のメンタルケア、自立の支援。



地震直後、避難所となった「若葉小学校」は運営を教職員が行っており、大変な状況だった。その後、自治会に運営を任せる際にサポートを依頼され、少しでも元気で明るい笑顔で新しい一歩を踏み出してもらえるように、被災者支援・避難所運営サポートを始めた。

炊き出し

『災害救援ネットワーク北海道』と協力し、熊本市及び益城町等の避難所を中心に炊き出しを行う。



熊本地震後、テレビなどで現地の情報を見ていて「支援が行き届いていない。食べられない人がたくさんいる。何とかしないと」と思い、現地入りを決めた。知人のご縁で「チーム熊本」と出会い、「崇城大学ボランティアビレッジ」に拠点を置き一緒に活動した。

一般社団法人 熊本支援チーム

代表理事あいさつ





熊本支援チーム 代表理事
池田 親生

私たち「熊本支援チーム」は、東日本大震災や2016年熊本地震での災害支援経験があります。しかし、2020年7月豪雨は新型コロナウイルス感染症下で初めての災害支援となったため、県外からのボランティアを受け入れることができないなど“外からの支援”に難しさがありました。試行錯誤しながらの活動にはなりましたが、被災者の方たちの力に少しでもなれたらとの思いで、ボランティアの手配や現地の活動拠点確保と整備、家屋からの家財道具搬出など、“とにかく今できること”をしてきたつもりです。そして、発災から2年が経った今も支援活動を続けています。

熊本支援チーム 代表理事
三城 賢士

新型コロナウイルス感染症の影響で、県外から被災地へボランティアに来てくれる人は減りました。しかし、県内の支援団体や個人の支援者との関係性は、2016年熊本地震で私たちが活動したときに比べ、より高まったように思います。また、県外の支援者が現地に来なくても支援できる方法など、新しい支援のカタチを構築することもできました。自分たちで何でもできるわけではありません。支援をしたいと考えている団体や個人それぞれに強みがあり、それを理解し、連携することがこれからの被災地支援ではより重要になってくるはず。この記録誌を通して私たちの経験知をお伝えできれば幸いです。

一般社団法人 熊本支援チーム

団体概要

当法人は、全国及び熊本の災害支援を目的に、被災地域や企業・支援団体・NPO等と協働し、被災者の救済、生活再建や被災地域の復興支援活動に取り組むことにより、安全で安心して暮らすことができる社会の形成に寄与することを目的とし、次の事業を行う。

1. 被災地への援助及び救援、支援の事業
2. 被災者の生活再建、就業、生きがい創出を支援する事業
3. 被災地における産業再建、新規起業を支援する事業
4. 被災地における住民福祉の向上と文化の振興を支援する事業
5. 被災地の復興及び防災にかかる人材育成事業
6. 災害関連情報の収集及び発信事業
7. 民間団体、企業、公的機関等とのネットワーク構築事業
8. ボランティアの募集、受け入れ、派遣に関する事業
9. 復興まちづくりのための調査研究、実践、普及に関する事業
10. 災害救援、復興、防災に関する啓発及び広報事業
11. 義援金、支援金の募集及び基金運営事業
12. 復興支援に関わるチャリティ事業
13. 民間団体を育成するための指導助言に関する事業
14. 被災地の産業振興、被災者の収入確保、支援団体の資金確保に資する収益事業
15. 前各号に掲げる事業に付随又は関連する事業

団体名	一般社団法人 熊本支援チーム （旧名称） 東日本大震災・熊本支援チーム 熊本地震・熊本支援チーム	役員	◎代表理事 池田 親生（竹あかり演出家） ㈱C.K LAB 代表取締役 ◎代表理事 三城 賢士（竹あかり演出家） ㈱ちかけんプロダクツ 代表取締役 ◎代表理事・事務局長 野口 修一（一級建築士） 環境共生施設研究所 代表 ◎代表理事・事務局長 荒木 真吾 ㈱ディカーナ 代表取締役 ◎監 事 松﨑 武則（税理士法人 近代経営）
設立日	任意団体設立 …… 2011年3月12日 一般社団法人化 …… 2020年7月13日		
法人所在地	〒861-2101 熊本県熊本市東区桜木3-1-26		
ホームページ	https://www.kumamoto-team.net		
電子メール	office@kumamoto-team.net		

※当法人は、災害・緊急時に災害現場での意思決定・契約行為がスムーズに行えるよう、4名の共同代表制及び2名の兼任事務局長制の組織です。

2020年7月 熊本豪雨災害



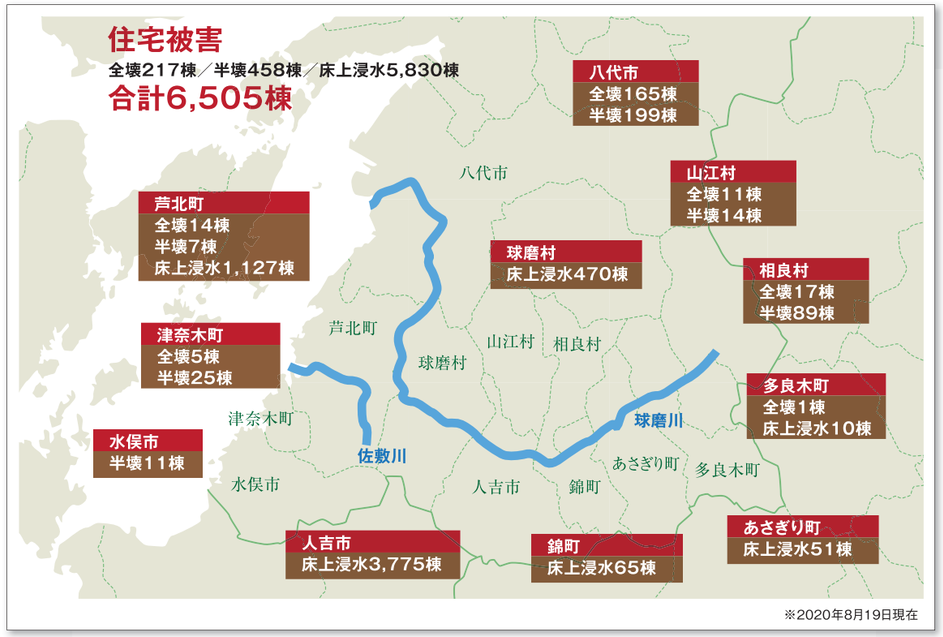
線状降水帯が長時間（2020年7月3日23時頃～4日10時頃までの11時間）にわたって停滞。7月4日朝方にかけての12時間降水量は、県南9地点〈球磨川水系（山江、一勝地、人吉、上、多良木、湯前横谷）、田浦、水俣、牛深〉で観測史上1位を記録しました。広範囲に降った大量の雨が球磨川等に流れ込み、県内の複数の河川で氾濫。県南・天草で土砂崩れ等を引き起こしました。さらに、7月6日から8日未明にかけての断続的な非常に激しい雨により、県北地域でも川の増水、土砂崩れ等を引き起こしました。

参考資料：熊本県土木部「令和2年7月豪雨被災状況【速報版】」









参考資料：熊本県土木部「令和2年7月豪雨被災状況【速報版】」

一般社団法人 熊本支援チームは人吉市を中心に支援活動を行いました。

熊本支援チームは発災翌日の7月5日から人吉市とその近隣地区に入り、情報収集・物資支援をスタート。7月7日より活動拠点を人吉市内に設置し、本格的な支援活動を開始しました。活動拠点は9月10日まで「ホテルサン人吉」（上青井町）、9月11日から12月31日まで「ひとよし森のホール」（駒井田町）、2021年1月から2021年8月末までは「赤山様邸」（駒井田町）をお借りしました。

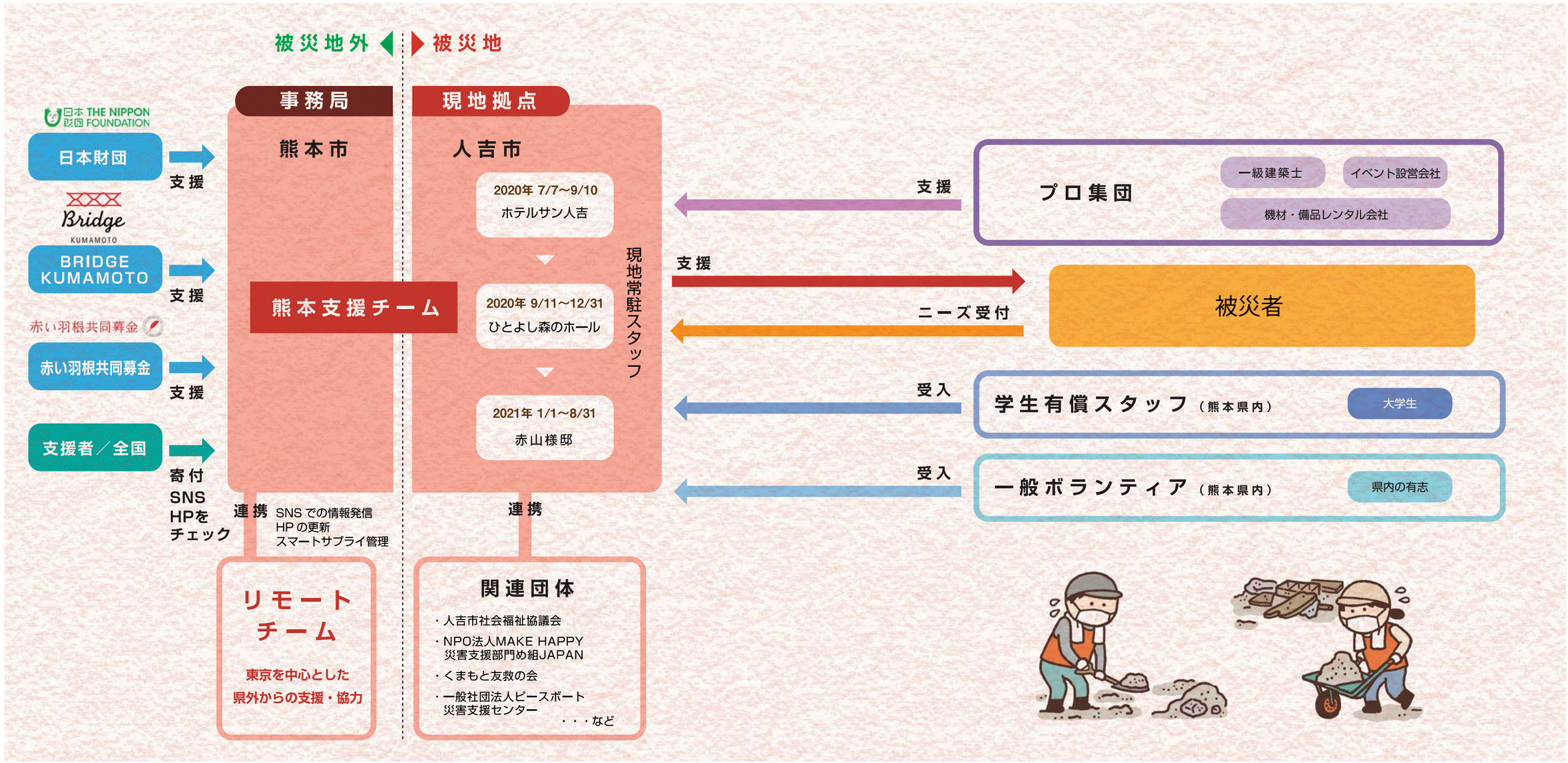


一般社団法人 熊本支援チーム

熊本豪雨災害の体制

熊本支援チームは、東日本大震災や熊本地震などでの災害支援の経験を基にしながら、コロナ禍による新しい災害支援のあり方を模索。独自の支援体制を構築しました。大きな特徴は、被災地内に活動拠点を設け、被災地外に事務局を設けたことです。

「被災地でしかできないこと」と「被災地外でもできること」を整理・分担したことで、支援活動のスピードアップと効率化、支援者の拡大につながりました。



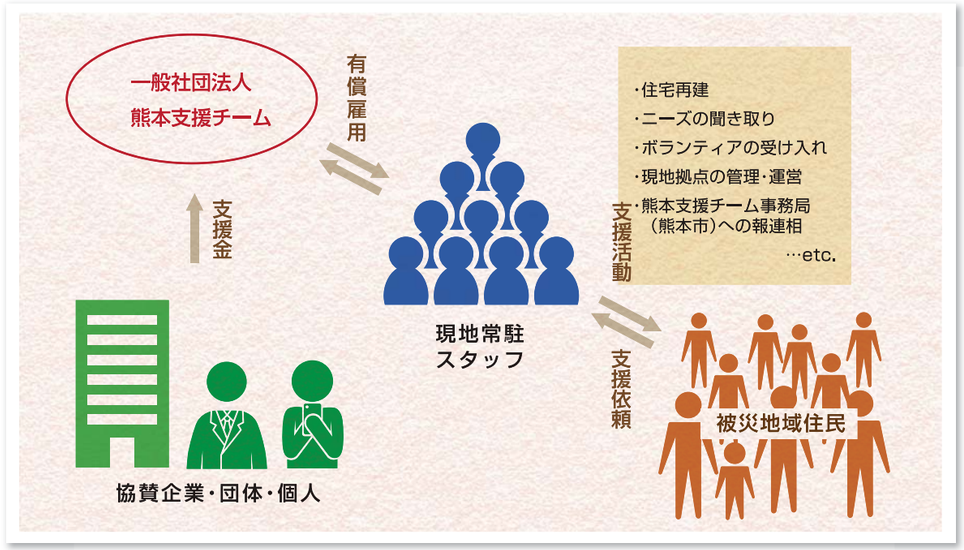
現地常駐スタッフと現地活動拠点を確保



現地常駐スタッフとは？

一般社団法人熊本支援チームが雇用契約を結んだスタッフです。被災地に常駐し、最前線で活動してもらいました。スタッフへの給料や活動経費には、私たちの想いに共感していただいた企業・団体・個人からの支援金を使わせていただきました。

一般的に、被災地で活動する人や団体は、多くが自分たちのお金または自分たちで集めた支援金を活動費に充てています。そのため、それがなくなってしまえば、活動を続けることができません。そこで考えたのが、雇用することで活動する人たちに定期的に入ってくるお金を確保し、長期的に活動してもらえるという仕組みです。これまでに10名のスタッフを雇用しました。



POINT

- 生活や活動のための資金を定期的に確保できることで、長期的な支援ができるようになる。
- 現地に滞在することで土地勘や住民との連帯感が生まれ、スムーズに活動できる。

現地活動拠点とは？

被災地での迅速かつ長期的な支援活動を行ううえで、常駐スタッフやボランティアが集える場、滞在できる場が必要になると考えました。そこで現地の方に協力いただき、活動拠点を設置。2020年7月7日から2021年8月末までの間に、3カ所を活用させていただきました。

混乱を極める被災地に拠点を構えるのは、なかなか難しいことです。しかし、スタッフやボランティアの拠点となるだけでなく、被災者のニーズを受け付ける窓口にもなります。また、長期滞在が可能になることで地域住民との交流が生まれ、復旧・復興の状況を肌で感じることもできるなど、現地活動拠点を設けることには多くのメリットがあります。

ホテルサン人吉

2020年7月7日～







ひとよし森のホール

2020年9月11日～





赤山様邸

2021年1月1日～





POINT

- 現地活動拠点を設けることで、長期的かつスムーズな支援活動につながる。
- 長期滞在できることで被災地に通う時間を削減でき、より長く活動時間を確保できる。
地域住民との交流が生まれ、復旧・復興の状況を肌で感じることもできる。
- 被災者にもボランティアにも頼ってもらえる窓口的な場所になる。

私たちが伝えたいこと

熊本支援チームが雇用した現地常駐スタッフの中から、初期から活動に取り組んだ3名に話を聞きました。嶋村と小林は7月7日に、坂本は15日に赴任。その後も人数は増え、最大時は10人に。支援活動が完了していくに連れ、少しずつ規模を縮小していきました。



現地スタッフ

坂本 洋展（ひろのぶ）

Profile
天草生まれ、熊本市育ち。豪雨災害の発生時は兵庫県にいたが、熊本地震の際に熊本支援チームで活動した経験から、長期で支援するスタッフが必要になると思い帰熊。7月15日に被災地入り。事務局のサポートや支援物資の管理などを担当。メンタルケアを目的に、みなし避難所でのお茶会も実施。

「現地に拠点を設けたことで、地域愛と復興に貢献したいという強い気持ちが芽生えました」

コロナ禍の支援で苦労したのは、被災者のメンタルケアに思うように取り組めなかった点です。私は熊本地震の際に、被災者のメンタルケアを目的に1年ほど仮設団地でお茶会を実施していました。今回も計画したのですが、コロナ禍で残念ながら2カ月ほどしか実施できず…。通常、被災地では仮設団地ごとに自治会ができるのですが、今回は設置されず、住民との窓口はすべて社会福祉協議会が担っていたため、緊急事態宣言が出るとあらゆるイベントが中止となり、動きたいのに動けないという状況が続いてしまいました。

一方で、学んだことやプラスになったことはたくさんあります。現場での活動内容の明確さと、地域とのつながりの強さが特に印象に残っているのですが、熊本支援チームの組織としての経験値が上がったことと、被災地に活動拠点を設けたことが理由ではないかと思います。そのような組織で長く経験を積んだことで多くのことを学ぶことができ、地域の方とふれあい、再開したお店に行くなどで地域の復興を身近に感じることもできました。

私は2020年12月末で雇用契約を終え、翌年1月から一人で人吉市の地域おこし活動に取り組んでいます。被災地に拠点を設けたことが、地域の復興という大きな視点を持つことにつながり、新しい活動にチャレンジするきっかけとなりました。人吉に来て以来、どんどんこの地域のことを好きになっています。



現地事務局

小林 始佳（はるか）

Profile
天草市出身。熊本支援チームとのつながりは熊本地震から。ボランティアビレッジでボランティア希望者の受け入れを担当していた経験から、現地事務局の担当に。7月7日に被災地入り。問い合わせや支援依頼の電話対応、拠点整備、熊本支援チーム本部との連携、ボランティアの受け入れなど担当。

「現地拠点、現地常駐スタッフの存在は被災地の方々の安心感につながると思います」

私たち現地常駐スタッフは、現地拠点で暮らしていました。現地拠点があることのメリットはさまざまで、ひとつは移動時間のロスが少ないので活動時間を多く確保できること。そして、スタッフとずっと一緒なので、いつでも相談・報告ができること。何かあったときにもすぐ動けます。それから、長く現地にいることで住民の方々との信頼関係が深まり、連帯感も生まれました。日々変わる地域の様子を見ながら、復旧・復興を地域の方と一緒に感じられたことは、私の中で大きな財産になっています。

私は熊本地震と豪雨災害の両方で支援活動を行いましたが、地震と水害では状況がまったく異なることを実感。特に、水害は家屋の復旧に時間がかかり、長期的なサポートが必要だと痛感しました。私たちのような現地常駐スタッフが長く地域に滞在することで、住民の方々の安心感が少しは増すのではないかと思います。ずっと支援に関わっているからこそ、地域で会った際に声をかけてもらえます。つながりができたことで、もし何か困ったことがあったときに連絡してもらえるのかなと。それが住民の方々の安心につながるかなと思うので、現地拠点や現地常駐スタッフには大きな意味があると考えています。



現地支援リーダー

嶋村 誠一

Profile
熊本市出身。防災士。7月4日は東京にいて、発災を知り帰熊。7日に被災地入り。現場リーダーとして、現地での作業全般の取りまとめを担当する。住民からの支援依頼を受け、ニーズの聞き取り、作業内容や流れの決定、担当チームの編成、ボランティアスタッフへの作業内容の指導などを行う。

「現地拠点と有償雇用はコロナ禍の災害支援において大きな意味を持ちます」

私はこれまでにさまざまな被災地で、個人で支援活動を行ってきました。活動資金や滞在費は、それまでに働いて貯めたお金や、私の活動を応援してくれる方からの支援金を充てていました。今回は組織の一員となり、熊本支援チームから定期的に給料をいただけたことで動きやすく、長期的な支援活動につながったと感じています。実際は、有償だろうが無償だろうが、支援活動はやりますが、お金がなければできないことがあるのも事実。有償だったことで、できることは確実に増えました。

今回はコロナ禍での支援活動ということで、特に初期活動時のマンパワーの確保に苦労しました。通常、水害が発災すると、泥出しなどマンパワーが必要な支援活動を最初に大勢で一気に行います。その人手が、今回はコロナ禍のため確保できませんでした。そこで、クラウドファンディングを活用して学生有償スタッフ（19-20ページで紹介）を確保したのですが、それがすごく大きな力になりました。コロナ禍での災害支援では、人手をどう確保するかが難しく、重要な課題であると痛感しました。

また、今回の経験で、ボランティアに対する考え方も変わりました。これまで私は「ボランティアは我慢して当たり前。住民の方々はもっと大変なのだから」と考えていました。しかし、それではボランティアに参加するのは意識の高い人ばかりで、ハードルが高くなってしまいます。今回、現地拠点を設け、ボランティアの居住空間を整備したことがハードルを下げることにつながりました。人手を確保しづらい時期だからこそ、まずは来てもらうことが大事。そのキッカケを作ることが大切で、そのための環境づくりに取り組まなければいけないことを学びました。現地拠点の設置は、私たちの活動をスムーズにするのはもちろん、ボランティアの確保の面でも重要な役割を果たします。

クラウドファンディングで資金を集めて学生有償スタッフを確保

豪雨被災地ではコロナ禍のためボランティアを県内在住者に限定しており、人手不足の状況が続いていました。そこで、熊本支援チームは2020年8月10日から、熊本在住の大学生等を有償スタッフ（復興バイト）として雇用する新しい取り組みをスタート。夏休み期間中、活動1日あたり5,000円の給与と熊本県内で使える1,000円分の食事券を支給しました。

活動資金はクラウドファンディングを活用して全国から集めました。2,203名に応援いただき、総額2,026万円の支援金が集まりました。これを原資に、学生支援チームを発足させ、中期的な活動支援体制も構築しました。

POINT

- 被災地の人手不足と、学生のお金に関する課題を同時に解決する仕組み。
- 被災地支援に「行ってみようかな」と思わせるキッカケになる。友だちを誘いやすくなる。
- 学生はお金の心配をしなくていいので、支援活動に集中できる。長期で参加できる。
- 熊本県内で使える食事券を支給することで地域復興の一助になる。



クラウドファンディングの達成状況

詳しくはこちらをご覧ください。→



◆開始日：2020年7月25日
◆終了日：2020年8月19日
◆支援総額：20,261,500円
◆達成率：337%
◆支援者：2,203人
（熊本県内：約５％　熊本県外：約95%）

■クラウドファンディングの支援金使途

◎参加学生への給与（5,000円）＋食事券（1,000円分）の支給
◎参加学生への昼食代
◎学生受入れのための現地拠点整備費（熱中症対策等）
◎学生支援チーム運営事務費・諸経費
（各種保険料・消耗品費・車両費等）
◎クラウドファンディングリターン商品の代金・送料等
◎クラウドファンディング手数料
として、活用させていただきました。



被災地支援で経験し、感じたこと

熊本支援チームは今回、大学生４名を「学生リーダー」に任命し、学生ボランティアのまとめ役となってもらいました。その中のひとりである前元盾哉に、実際に「学生有償スタッフ」制度を利用した感想や支援活動を通して感じたことなどを聞きました。



学生有償スタッフ
リーダー 前元 盾哉（じゅんや）

Profile
北海道網走市出身。東海大学熊本キャンパスへの進学を機に熊本へ。2016年熊本地震の際に熊本支援チームで活動していた大学の先輩に勧められ、2020年7月の熊本豪雨災害の支援活動に参加。当初は無償ボランティアとして、8月10日からは学生有償スタッフとして活動。

ボランティアに行きたい気持ちを後押しする「学生有償スタッフ」の仕組み

正直、最初は災害についての知識や関心はありませんでした。熊本支援チームへの参加のきっかけは、2016年熊本地震の際に同チームで活動した大学の先輩からの「いろいろな人が集まって活動していて刺激を受けると思うから行ってみたら」というアドバイスです。参加することを決め、7月末に人吉へ。被災地の状況を見て衝撃を受け、その時から災害が“自分ごと”になりました。

当初は無償ボランティアでした。被災地入りして数日後に復旧作業現場のリーダーのひとりに任命され、仕事の割り振り、作業の進行計画、ボランティアの人たちの体調や安全の確認などを担当。当時は新型コロナウイルス感染症の影響で県外ボランティアの受け入れは行われていませんでしたが、毎日2～3名のボランティアが来てくれていました。

その後、学生ボランティアをまとめる学生リーダーに任命されました。そして8月10日、クラウドファンディングで集めた資金から学生たちに日当と熊本県内で使える食事券を支給する有償ボランティアがスタート。これは本当に大きな出来事でした。私を含め学生たちみんながお金の心配をしなくて済むようになったからです。私自身、バイトを辞めて熊本支援チームの活動に参加していたので、手持ちのお金がなくなれば活動は続けられないと思っていました。また、コロナの影響でバイトが減ったり無くなったりした人は「ボランティアに行く時間はあるけど、行くお金がない」という状況でした。それが、お金の心配をしなくてよくなったことで私たちは学生を誘いやすく、学生は参加しやすくなり、結果100名以上が集まったのです。学生の背中を押す良い仕組みだったと思います。

「協力してほしい」と声を出すこと、やりたいことを貫く気持ちを大切に

学生リーダーは私を含め、熊本大学、宮崎大学、熊本学園大学の学生の４名で務めました。活動中で特に印象に残っているのは、9月に実施したボランティアバスの企画（詳しくは42ページ参照）です。きっかけは、ある学生の「大学と被災地を運行するバスを用意すれば学生は来やすくなり、募集もしやすいのではないか」というアイデアでした。しかし、実現に向けて取り組んだものの計画は頓挫してしまって…。でも、私たち学生リーダーは「できる！」と思って後押しすることを決めました。実際に運行するにはドライバー代や燃料代などで15万円の経費が必要で、悩んだ末に熊本支援チーム代表理事の池田さんたちに相談してみることに。すると「応援してくれる大人はきっといる。だから直接伝えてみたら」と、ボランティアバスについて大人の人たちに話せる場を作ってもらい、15万円以上の支援金を集めることができ、バスをレンタカーで手配することができました。“声を出して協力してもらうことの大切さ”を実感しましたね。それに、熊本の大人は学生に前向きなアドバイスをくれる人が多いという印象も持ちました。「応援するよ」と言ってくれる熱い人、良い人が多くて、熊本のことがいっそう好きになりました。

一方で、準備を進める中で、「バスは無理」や「大勢来てもらっても運営側が管理できない」と言う人たちもいました。前例がないことをやろうとすると、こんなにもいろんな人から「できない」と言われるのだと驚きました。しかし、結果的には多くの人がボランティアバスを利用して来てくれて、私たちもきちんと管理でき、復旧作業はずいぶん前進しました。「できない」という言葉は、学生たちのアイデアをつぶす原因のひとつになります。今回の成功体験は、自分のこれからの人生に大きな影響を与えてくれました。











自分たちで考えて次のフェーズの支援へ

2020年10月頃になると、ボランティアに来る人は少なくなってきました。そこで、これからは被災地にもっと人を呼ぶことが必要だと考え、メインの活動を人流・交流をつくるイベント企画にシフトチェンジ。長崎と熊本の大学生の交流会を開催したり、被災地を支援してくれている大人たちに人吉市へ来てもらって話をしたりするなど、被災地と人をつなぐイベントをやってきました。そして、人のつながりの大切さを実感したことで、私個人の活動として2021年4月に熊本市でシェアハウスをオープンしました（別の目標が見つかったため現在はクローズ）。

今回の活動は、被災地の支援が最大の目的です。しかし、その支援が学生のためになり、私自身のためになりました。こういう経験をぜひたくさんの学生にしてほしいと思います。自分の将来にきっとつながるはずです。今回の活動を通して、「今後も災害が起こった時には動きたい」と話していた学生たちがいました。ボランティアや被災地支援の意識の芽吹きは確実にあったと感じています。そして私自身、熊本支援チームで自分らしい生き方や大切なことを学ぶことができました。



スマートサプライとの連携で
全国の想いを被災地へ



スマートサプライ × 熊本支援チームのホームページ

https://smart-supply.org/projects/kumamoto-team

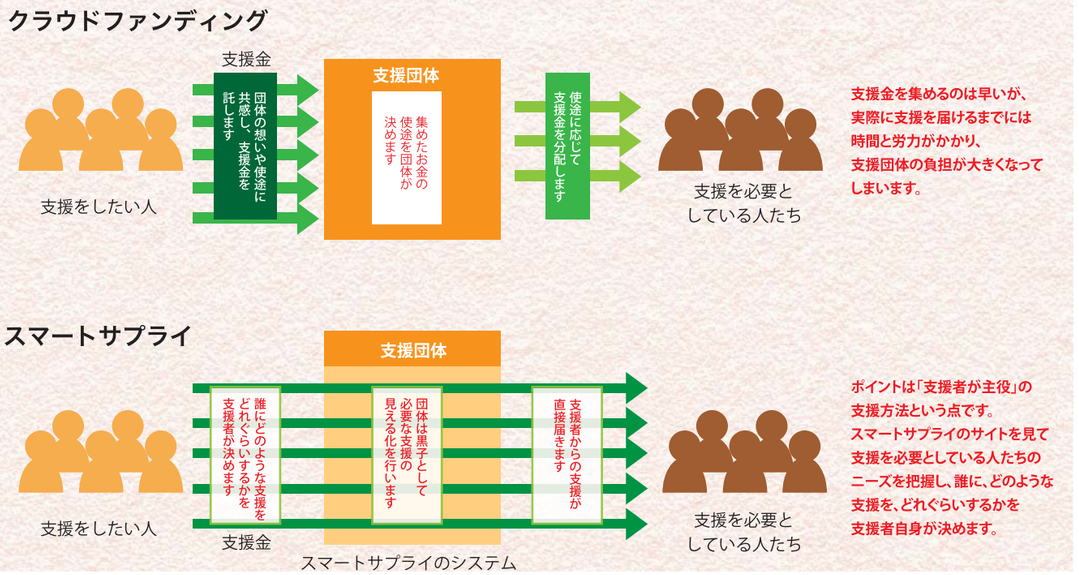
※現在、支援の受付は終了しております。

『スマートサプライ』は、東日本大震災をきっかけに生まれた市民参加型の支援プラットフォームです。「必要なひとに必要な支援を必要な分だけ」を気軽に、誰もが貢献できる仕組みになっています。熊本支援チームは『スマートサプライ』と連携し、全国の皆様の想いを被災地へ届けました。

スマートサプライとは？

『スマートサプライ』の具体的な仕組みとしては、まず被災地を支援する団体が現地で必要な物資の個数や値段をリスト化して『スマートサプライ』のホームページ上に公開します。それを協力したい人が見てネット通販で購入手続きをすると、支援団体へと配送されるというもの。支援の達成率は随時更新されるため、現地へ余分に届くことはありません。

クラウドファンディングとスマートサプライの違い



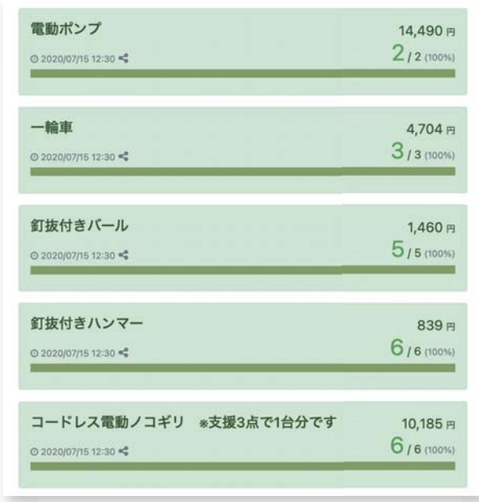
支援金を集めるのは早いが、実際に支援を届けるまでには時間と労力がかかり、支援団体の負担が大きくなってしまいます。

ポイントは「支援者が主役」の支援方法という点です。スマートサプライのサイトを見て支援を必要としている人たちのニーズを把握し、誰に、どのような支援を、どれぐらいするかを支援者自身が決めます。

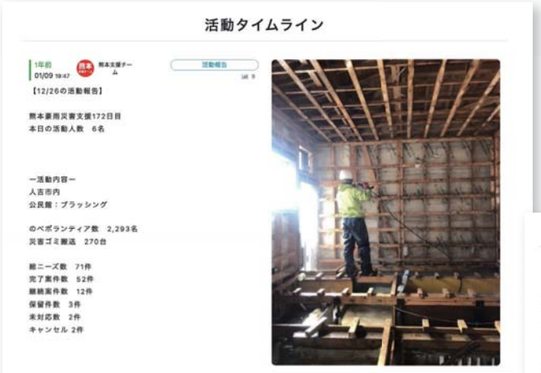
実際のスマートサプライのページ



芦北町・球磨村・人吉市で必要な泥かき・廃材撤去作業の道具の支援を呼びかけるページ



被災者の方たちが必要としている物資の支援を呼びかけるページ



同サイトでは熊本支援チームの活動も随時報告してきました

同サイトは支援者が応援メッセージを書き込むこともできます



POINT

- 「必要なひとに必要な支援を必要な分だけ」行うことができる。
- ネットを使って支援できるので全国、海外から支援できる。
- 支援の達成率、活動報告を随時見ることができるので、被災地のリアルな状況を把握できる。
- 被災地のニーズと外部からの支援内容とのミスマッチを防ぐことができる。
- 時間や復旧状況と共に変わっていく被災地からの支援物資のニーズを随時反映し、発信することができる。

イベント設営のプロと連携
発災から２日後に
被災地内に活動拠点を設営



協力：TSP 太陽株式会社

https://www.tsp-taiyo.co.jp/

TSP太陽株式会社は、全国各地に営業所を持つイベントエンジニアリング企業です。豊富な知識と経験を生かして、ボランティアのベースキャンプを設営いただきました。具体的には、被災した「ホテルサン人吉」に照明や冷房機器、仮設トイレ、パーテーションなどを整え、ライフラインを復旧。ボランティアが常駐できる活動拠点を作っていただきました。熊本支援チームからの依頼に24時間以内に応えていただき、発災から2日で完成させるという異例の早さで作業いただきました。



TSP 太陽株式会社
代表取締役社長
能村 祐己さん

「災害が起きて街やライフラインが機能しなくなった時に、早い段階で必要となるのが“拠点”です」

拠点が必要な理由は、ボランティアの滞在場所や物資の置き場所を速やかに整えることが、スムーズな災害支援につながるからです。私が代表を務めるTSP太陽株式会社は、イベントの企画設計から運営までをトータルサポートする会社です。人が多く集まる会場の設営を得意とし、全国各地に営業所を持っています。その一方で、本業のノウハウを生かし、阪神淡路大震災や東日本大震災、平成28年熊本地震などで仮設避難所や医療テント、ボランティアのベースキャンプを設営する形で災害支援も行ってきました。弊社にはモノがあり、知識があり、技術もあります。ですから、緊急性が求められる有事の際にいち早く動くことができるのです。社員もそれを理解しているので、災害が起きると社内から「何かできることはないだろうか」と自発的な声が上がります。令和2年7月豪雨では社員だけでなく、協力企業もすぐに動ける支援体制を整えておいてくれました。こういった土台があったから、ボランティアの常駐活動拠点を素早く完成させることができたのだと感じています。







TSP太陽株式会社に設置いただいたパーテーションや冷蔵庫、発電機、エアコンなどのインフラ整備。

建築のプロと連携
技術・知識が向上し、
チームが成長する機会に



協力：一級建築士 水上 文藝（ふみのり）さん

設計事務所「YASUI SEKKEI VIETNAM」（ベトナム・ハノイ市）代表取締役。熊本県立大学の学生としての顔も持ち、バイオマスや自然・再生エネルギーに関する研究にも取り組んでいらっしゃいます。かつては熊本県庁職員として、まちづくりや建築関係の業務にも携わっていらっしゃいました。今回、家屋などの建物の復旧作業において、技術的な相談をさせていただき、アドバイスをいただいたことで、現場の作業をスムーズに進めることができました。加えて、技術や知識が向上し、チームのレベルアップにもつながりました。



一級建築士
水上 文藝さん

「建築のスペシャリストとボランティア団体とのコラボレーションは有効な支援の型になります」

豪雨災害発生時、私は熊本県建築士会の人吉支部の所属でした。「地元の建築士会として、相談コーナーを作って地域の人々に寄り添い、最後まで救済していくべき」と支部長に提言し、８月に相談コーナーを設置。支援活動を進めていました。ちょうどその頃、熊本支援チームが活動していると聞き、お会いすることに。被災者から私たちへの相談は、家屋や敷地内の泥を出してほしいというものが多かったので、最初の泥出しを熊本支援チームにお願いして、こちらは技術面などでいろいろとアドバイスをしながら復旧を進めていくという作戦をとることにしました。被災状況は一軒一軒異なるため復旧作業をすべてマニュアル化することは難しく、各現場での判断が必要になります。その時に、建築のプロからのアドバイスがあるのは「とても心強いし、成長につながる」との声を熊本支援チームからはいただいていました。建築のスペシャリストとボランティア団体とのコラボレーションは「熊本方式」として、これから発生する災害に対しても重要な支援のカタチになると期待しています。




「ひとよし森のホール」は防音仕様のため構造が複雑だったが、水上さんのアドバイスによって復旧工事はスムーズに進んだ。




壁を剥がす際に電気ケーブルを外すか残すか。素人では判断が難しいが、「電気はいずれ全部やり直す必要があるので取り外していい」と水上さんからのアドバイスがあり、現場は安心して復旧作業を進めることができた。

一般社団法人 熊本支援チーム
これまでの活動

住宅再建事業

2020年7月6日より人吉市に常駐し、災害復旧支援を中心に活動を
行ってきました。その状況と内容についてご紹介します。






2021年9月末時点での活動状況

ボランティア数（のべ）……2,854名
災害ゴミ搬送 …… 284台

総ニーズ数	完了案件数	継続案件数	保留件数	未対応数	キャンセル
76件	72件	0件	0件	0件	5件

2021年9月末時点での活動内容・詳細別完了数

- 室内泥出し……9件



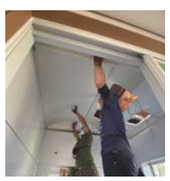

- 天井剥がし……10件




- 床下泥出し……26件




- トイレ水回り解体……16件




- 引っ越し……1件




- 家財出し……19件




- 壁剥がし……27件



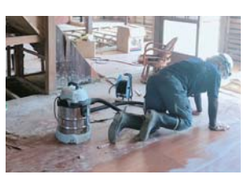

- 床剥ぎ……24件



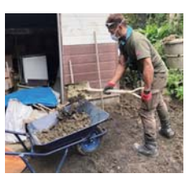

- キッチン解体……13件




- 清掃、消毒……29件




- 敷地泥出し……6件




支援物資の配布

2020年9月10日まで熊本支援チームの拠点とさせていただいた「ホテルサン人吉」前に物資倉庫を設置。ロータリークラブ様からの支援物資の管理、日本全国から届く支援物資の受け取り、物資を必要としている人や団体への配布を行いました。















高圧洗浄機 無償レンタル活動

全国からの寄贈や、お笑いタレント・作家の西野亮廣様から寄贈いただいた高圧洗浄機を必要とされる方々に無償レンタルしました。









炊き出し

自分たちで炊き出しを行うのではなく、炊き出しをしたい人や店に対して、炊き出しできる場所や環境を提供する活動を行いました。「ホテルサン人吉」を拠点としていた2020年9月10日まではホテル前のスペースを、拠点を「ひとよし森のホール」に移してからは12月31日まで同ホール駐車場を炊き出しの場とさせていただきました。







地域団体等からの各種要請に応える活動





人吉市社会福祉協議会からの支援依頼を受け、人吉市社会福祉協議会のボランティアセンターに仮設トイレ4台の設置・提供を行いました（2020年7月11日）。その他、現地ニーズにも細やかに対応し、対応可能な案件についてはできる限り支援してきました。

クラウドファンディングサポート活動

被災者・被災団体に対して、クラウドファンディングを使った再建資金などを全国から募るページの立ち上げ、写真・動画撮影等のサポートを行いました。





エブリバ！
～それでも僕らはこの川と生きていく～





災害発生から3カ月が経ち、メディアで報道されることも少なくなってきた被災地の状況。“今”の様子を伝えたいという想いから、熊本を中心にテレビ、ラジオなどで活躍しているリポーター・高橋よしえさんと被災地支援に関わる有志メンバーが立ち上がり、熊本の被災地と全国の皆さんをつなぐ企画「エブリバ!」を計画。高橋さんが球磨川の上流から下流までを2020年10月4日から5日間かけて走り、被災地域の現状や住民の想い、球磨川が育んできた豊かな自然を伝えていく動画を制作・発信しました。熊本支援チームも「エブリバ!」チームの一員として企画に参加し、ランやライブ配信のサポートを行いました。

スタディーツアーの企画（若手育成事業）







2021年3月から月1回開催。熊本支援チームの活動に携わってくれた大学生たちに被災地スタディーツアー・勉強会を企画・主催してもらうことにより、次世代の地域リーダーを育成しようとするもの。県外ゲストなどを交えて、被災地を巡りながら、災害支援活動のノウハウや学びを伝えていく機会を作っています。

クリスマスマーケット in 人吉＆
えんとつ町のプペルトラック＆光る絵本展
in 青井阿蘇神社



人吉市の子どもたちへのクリスマスプレゼントとして、にしのあきひろ氏の絵本「えんとつ町のプペル」の光る絵本展を2020年12月23・24日に青井阿蘇神社で開催しました。









クリスマスマーケット熊本

2020年12月11日～25日にサクラマチクマモト屋上「サクラマチガーデン」で開催されたクリスマスマーケット熊本。会場にて熊本支援チームの活動報告ブースを出展しました。



継続支援の仕組みづくり

熊本支援チームは、今後も人吉で継続的な支援を続けていくために、そしてこれから日本のどこかで災害が起きた時に私たちが持つノウハウを素早く提供できる体制を作るために、常駐スタッフを継続的に雇う必要があると考えました。そのために立ち上げたのが、「熊本支援チームサポーターズ」というコミュニティです。さらに、常駐スタッフとして活躍してくれた2名は、2021年から独自の新しい取り組みをスタート。私たちは被災地を継続支援していくために、さまざまなことにチャレンジしています。

現地スタッフの新しい取り組み

2022年2月5日
人吉市中心街に「笑顔食堂」オープン!



笑顔食堂 店主　小林 始佳

人吉市に移住



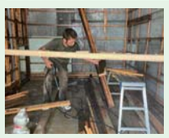


熊本支援チームの現地スタッフとして活動した小林始佳（活動内容は15-18ページで紹介）。「支援だけでなく復興の面でも役に立ちたい」と、以前からの夢だった飲食店の開業に人吉市で挑戦することを決めました。「地域の人たちに来ていただきたいのはもちろんですが、以前にボランティアで人吉市に来た人たちが再び訪れた時に気軽に立ち寄れる場所をつくりたいという想いもありました」と開業を決めた理由を話します。仲間や地域の人たちの協力、そしてクラウドファンディングでの215名の支援者のおかげで、2022年2月5日、念願の「笑顔食堂」をオープン。小林は住民票を人吉市に移し、復興への道を地域と共に歩んでいます。

店の場所は人吉市中心街。2階の1.2mの高さまで浸水した元飲食店を仲間たちと一緒に清掃・改修。黄色の入口ドアが印象的な、ナチュラルで温かい雰囲気の店をつくり上げました。1階はカウンター席とテーブル席のある飲食店、2階には防災用具を準備するなど防災拠点として活用していく予定です。さらに、「子ども食堂」の活動にも取り組んでおり、大人が1枚200円のチケットを購入し、それを来店した子どもたちが使って食事をする「夢食堂」プロジェクトを導入しています。

「地域の子どもたちやおじいちゃん、おばあちゃんが気軽に来られて、頼ってもらえる場所にしたい。そして、次に災害が起きても“笑顔食堂を頼ったら大丈夫”と思ってもらえるような存在になっていきたい」と小林は今後の目標を話します。







店舗を清掃・改修する様子

笑顔食堂
住所／熊本県人吉市紺屋町106-8
フェイスブック、インスタグラムで情報発信中

フェイスブック　インスタグラム

現地スタッフの新しい取り組み

2021年4月から
人吉復興商店街「モゾカタウン」のお手伝いをスタート!

坂本 洋展

人吉市在住



「人吉復興商店街モゾカタウン」の情報はこちら

ホームページ　フェイスブック　インスタグラム

熊本支援チームの現地スタッフとして活動した坂本洋展（活動内容は15-18ページで紹介）。2020年12月末に熊本支援チームから離れ、2021年4月から縁あって人吉復興商店街「モゾカタウン」のスタッフとして活動中。SNSの運用を中心に、イベントの準備や運営のサポートなども行っています。「熊本支援チームの現地スタッフとして現地拠点で生活していた頃は“居させてもらっている”という感覚でしたが、人吉市に家を借りて暮らすようになって、もっと地域と近くなり、事業者さんのことや、これから必要な支援などが分かってきたように思います」と話します。特に人吉の人たちの“恩”を大切にする気持ち、そして日頃から互いに恩を積み重ねてつながる姿に触れ、一人一人を大切にすることの重要性に改めて気づいたそうです。

一方で、復旧から復興へと進む期間の大変さと、地域づくりの難しさも痛感しているそうです。「お店に人がたくさん来てくれると活気が出て、経済の復興と精神の復興につながります。しかし、コロナ禍で外からお客さんが来にくいという状況が、復興をより難しくしていると感じています。被災地は復旧が落ち着いたら終わりではなく、長く見続けていくことが大切です。ぜひ人吉をはじめ被災地に足を運んでみてください。モゾカタウンも皆さんをお待ちしています!」と呼びかけます。

「熊本支援チームサポーターズ」の立ち上げ

全国で精力的な災害支援活動を展開する熊本支援チームのサポーターコミュニティです。月額500円でサロンに参加いただき、これから日本中で起こる災害に備えてコミュニティ内でノウハウを蓄積・共有していきます。また、さまざまな業界からゲストを招き、防災をテーマにしたメンバー限定トークイベントや、災害地の報告会も行います。

サポーターズは1,000名を目標人数とし、その資金で常駐スタッフ2名を雇い、いつでも日本の災害に対応できる強いチームにしていきたいと思っています。また、サポーターズメンバーの方々には被災時に役立つ情報や、お互いに支え合えるコミュニティをご提供します。現在もサポーターを募集中です。皆様のお力添えをいただけますと幸いです。どうぞよろしくお願いいたします。詳しくは右記ホームページをご覧ください。



https://community.camp-fire.jp/projects/view/325816

月額500円のサロン会員募集中！



活動拠点の協力

ホテルサン人吉

人吉市上青井町 166

第１拠点　**2020年7月7日～9月10日**

発災3日後に被災地内に拠点を設置
ボランティア、支援物資の受け入れ場所に

「ホテルサン人吉」は、球磨川と支流の山田川の合流点近くに立つ観光ホテル。令和2年7月豪雨では地下の機械室に濁流が流れ込み、1階は天井付近まで浸水しました。自身の施設復旧も急がれる中、熊本支援チームからの依頼に応え、7月7日から9月10日の約2カ月にわたってホテル2階の大宴会場をボランティアの活動拠点として提供いただきました。




















被災地の協力者

ホテルサン人吉

（右）代表取締役社長　村田 優子さん

（左）専務　森原 勝已さん

2020年7月4日、氾濫した球磨川がホテル1階の窓ガラスを突き破り、館内は濁流にのまれました。幸いお客さまに被害はなかったものの、施設は復旧の見通しが立てられないほどのひどい状態です。そんな中、知人を通じて、熊本支援チームからボランティアの活動拠点として敷地提供の依頼を受けました。受け入れに全く迷いがなかったわけではありませんが、とにかく前に進まなければとの思いで受諾し、2階の大宴会場を開放することに。浸水により館内の水道、電気、ガスがストップしており、トイレも使えない状態でしたが、熊本支援チームと連携する「TSP太陽（株）」が駆けつけてくれ、あっという間に環境を整備。熊本支援チームの事務局が開設され、大勢のボランティアが集まったホテルは被災前の活気が戻ったようでした。何の見返りも求めずに人吉のために汗を流してくれる彼らの姿に、私たちホテルスタッフはどれだけ励まされたことでしょう。2021年1月に宿泊営業を再開しましたが、「ホテルを災害前の状態に戻す」ではなく「より良いホテルとして復活させる」という前向きな目標を持てたのは、ボランティアのみなさんから勇気と希望をもらえたからだと思っています。

リニューアルを遂げた「ホテルサン人吉」

リニューアルオープンした「ホテルサン人吉」は、SDGsを考えたホテルへと進化を遂げています。重油を原料とするボイラー2基は水害を機に撤廃し、新たにエコ給湯を設置。客室には環境に優しいエコ歯ブラシ・エコヘアブラシを備えるなど、CO_2削減に取り組んでいます。





リニューアルオープン後の２階大宴会場の様子

https://www.sunhitoyoshi.jp/



活動拠点の協力

ひとよし森のホール

人吉市駒井田町 190-6

第２拠点　**2020年９月11日～12月末**

施設の復旧作業を行いながら同時に拠点としての役割も

ギャラリー兼女性専用宿泊施設として営業。約28坪の多目的ホールを有し、コンサートや音楽発表の場としても利用されてきました。2020年7月豪雨では1階部分が浸水。応急的復旧を行った後、「ホテルサン人吉」に次ぐボランティアの活動拠点として、9月11日から年末まで多目的ホールとゲストハウスを開放いただきました。

















被災地の協力者

ひとよし森のホール

代表　小川 香さん

まさに、あっという間。7月4日の未明に異変を感じて家の外に出た時にはもう、胸の高さまで水が来ていました。慌てて愛犬を連れ、携帯電話だけを持って高台へ避難。水が引いたのは朝の5時頃だったでしょうか。自宅と施設の様子を見に帰宅すると1階部分に浸水の跡があり、パーテーションや音響設備、飾っていた絵画などあらゆるものが流されていました。大切にしていたグランドピアノも泥水にまみれてボロボロになっており、自力で復旧作業を行いながら次第に心と体が疲れ切っていくのを感じていました。そんな時に「ホテルサン人吉」から、ボランティアの第二次活動拠点として施設を提供してもらえないかと相談がありました。受け入れ場所がなかなか見つからずに困っているということと、熊本支援チームに知人がいたことから、申し出を快諾。そこから約4カ月、ボランティアのみなさんと生活することになりました。当施設の復旧も手助けしてもらえたし、毎日元気いっぱいで挨拶をしてくれる彼らの笑顔に私自身の心が明るくなるのを感じました。拠点が移転した後も時おり顔を出してくれて、なんだか縁を感じています。

営業再開後の「ひとよし森のホール」

ホールは発災から1年後の2021年7月に営業を再開し、月1ペースでのコンサートを予定しています。ぜひ、被災した方やボランティアの方に気軽に足を運んでもらいたい！音楽や会話で心を癒せる場所を作っていくつもりです。



http://www.hmh-web.com/



活動拠点の協力

九州技術教育専門学校　理事長・校長

赤山 聖子さん宅

第3拠点　2021年1月～8月

最も長い時間を過ごした最後の拠点
好立地のおかげで活動もスムーズに

人吉校と熊本校で情報技術のプロを育成している「九州技術教育専門学校」。令和2年7月豪雨で人吉校の校舎は2階まで浸水。隣接する理事長・赤山さんの自宅と実家も1階は完全に水没してしまいました。学校の復旧に全力を注ぐ赤山さんをサポートするべく、熊本支援チームは自宅の復旧をサポート。その縁で実家を活動拠点として貸し出しいただきました。























被災地の協力者

九州技術教育専門学校
理事長・校長　赤山 聖子さん

7月4日の朝、私は夫と娘の3人で自宅1階に寝ていました。早朝、携帯電話から災害警報のアラームが。5時頃には「避難してください！」という消防団の呼びかけが聞こえ、2階に上がってみると、目の前を流れる山田川があと1mほどで氾濫しそうな高さまで水位が上昇していました。すぐに人吉校の校舎2階に学校の資料など大事な物を移動し、食料など必要最低限の物を持って家族で避難。校舎は1階が駐車場で、2階は玄関と自習室になっているのですが、2階まで浸水してきたので、さらに3階へ避難。何とか命を守ることができました。しかし、隣接する自宅と実家は1階部分が完全に水没してしまいました。

それからの日々は、多忙を極めました。ただでさえコロナ禍で業務が忙しくなっていた中、災害復旧が重なり、さらに理事長だった父が8月に他界して私が理事長を引き継ぐことになったことで、すべての力を学校の復旧に注ぐ日々が続きました。そのため、被災した自宅と実家の復旧には手が回らず困っていたところ、知人から紹介してもらったのが熊本支援チームです。自宅の壁剥ぎ、床剥ぎ、床下の泥出し、消毒、清掃などをしていただき、とても助かりました。その際、拠点がなくて困っていると聞き、学校の駐車場を提供。その後、取り壊すことを決めていた実家を拠点として使わせてほしいという依頼があり、貸し出すことにしました。熊本支援チームのスタッフからは、「被災地に近い場所に拠点を借りることができ、効率的な支援を続けることができた」という声や、「シャワーやトイレ、キッチンが使えたことで助かった」という声を聞いています。そして私自身も、解体するまでの間、実家を有効活用してもらえたのは良かったと思っています。生まれ育った家ですから、水害に遭って壊すことにはつらい気持ちはありましたが、思い出の家が復旧の役に立てたと思うと気持ちが楽になったような気がします。

復旧完了、未来を担う若者を育成

「九州技術教育専門学校」人吉校は、職員や学生たちの頑張りと多くの支援によって、無事に復旧完了。学生たちは勉学に励み、生き生きとした毎日を過ごしています。学校の詳しい情報および復旧情報はホームページをご参照ください。



http://www.ktec.ac.jp/

広がる支援の輪

被災地で活動する中で、さまざまなボランティア団体、個人、社会福祉協議会と連携。
輪を広げながら、復旧・支援活動を進めました。その中から、いくつかの事例を紹介します。

め組 JAPAN　「共同体」の気持ちで互いの活動を補完



NPO法人MAKE HAPPYの災害支援部門「め組JAPAN」。左はリーダーの今井健太郎さん。右は熊本出身のスタッフ・鍛島静香さん。鍛島さんは熊本支援チームとして熊本地震の支援活動に携わった後、め組JAPANに参加

「め組JAPAN」は東日本大震災、広島豪雨災害、熊本地震、平成30年豪雨災害、台風19号災害など、全国の被災地で復興支援活動を行っています。2020年熊本豪雨では、PCR検査を実施したうえで7月８日に被災地入り。被災者のニーズを聞き取りながら、現在も活動を続けています。熊本支援チームとは、一緒のグループとして活動するのではなく、互いの強みを活かして頼り合うような間柄。例えば、熊本支援チームは、め組JAPANからこれまで培った水害時の支援活動の経験を教えてもらい、熊本支援チームは地域との橋渡しの面でめ組JAPANをサポートするなど、互いに協力できることを見つけながら適宜連携をしています。「熊本支援チームは、とても心強い存在。共同体みたいな気持ちです」とリーダーの今井さんは信頼を寄せています。

人吉市社会福祉協議会

週１回の会議で情報・状況を共有

熊本支援チームは人吉市社会福祉協議会からの支援依頼を受け、7月11日にボランティアセンターに仮設トイレ4台を設置・提供しました（30ページで紹介）。その後、同協議会は8月後半から複数のボランティア団体との連携会議をスタート（毎週１回）。熊本支援チームも参加し、情報の交換や共有、活動の連携に努めています。「協議会ではできない部分を補完してほしいと考え、連携してもらいました。災害前に民間ボランティア団体との関係を築けていれば、もっと早い動きができたと思います。この連携をこれからに活かしていきたい」と同協議会事務局長の松岡誠也さんは話します。

人吉市社会福祉協議会は2020年７月10日にボランティアセンターを開設。2022年1月末時点で、ボランティアとして受け付けた人の延べ人数は19,331人、ボランティアが活動した延べ件数は1,754件にのぼります



連携会議参加メンバー
●人吉市
●人吉市社会福祉協議会
●NPO法人MAKE HAPPY災害支援部門め組JAPAN
●くまもと友救の会
●一般社団法人ピースボート災害支援センター
●九州看護福祉大学
●熊本支援チーム

熊本県内の大学生など





学生が自主企画した「ボランティアバス」で学生たちの支援の輪が拡大！

熊本支援チームはコロナ禍による深刻な人手不足を解決するため、クラウドファンディングで2,026万円の資金を調達し、県内の学生が有償で活動に参加できるプロジェクトを発足（19-22ページで紹介）。多くの学生が被災地でのボランティア活動に参加できる道を作りました。そこからさらに、学生たちは自身で活動の輪を広げていきます。チームリーダー３名を中心とする学生たちが「活動に参加したくても被災地までの交通手段がない」という学生のニーズを汲み、被災地を往復するマイクロバスを運行させるための募金活動を実施し、資金を集めることに成功。2020年9月8日・9日の2回、熊本市内と被災地を往復するマイクロバスを運行し、多くの学生の参加へとつなげました。



たくさんの方々に

ご協力いただきました。

たくさんの方々に ご協力いただきました。























リモートチーム

離れた場所から熊本支援チームをサポート
冷静かつ迅速に活動情報を発信

リモートチームは、その名の通り離れた場所から“リモート”で支援活動を行うチームです。中心となって動いてくれたのは、当時、東京在住だった渡辺春花さん。SNS運用サポートや事務局・バックオフィス立ち上げサポートのプロフェッショナルです。熊本支援チーム代表理事・池田親生との縁があったことからサポートを依頼。具体的には、熊本支援チームのSNSとブログでの情報発信、現地スタッフとの連携、学生支援チームの管理体制構築とコミュニケーション促進などです。

途中、2020年8月～9月頭まで、渡辺さんには熊本に来てもらい、熊本市の事務局や現地拠点でも活動してもらいました。「私自身も被災地を見て、現地メンバーの状況も把握した上で現場と連携しなければいけないと思い、熊本へ来ました。滞在したうちの数日は被災地で泥出しや家財運搬といった支援活動のお手伝いもさせてもらいました」と渡辺さん。さらに、「現地に行って状況を見られたこと、現地の人たちとコミュニケーションを取れたことは、リモートで情報発信の活動をしていく上でとても役に立ちました」と振り返ります。

今回、リモートチームにサポートをお願いしたことで、2つの大きなメリットがありました。一つは、「情報発信において冷静な判断ができる」という点です。被災地で文章を書くと、その時の忙しさや心持ちによって、つい感情的な文章になってしまったり、誰かを傷つける表現になってしまったりして、それに気付かず投稿してしまうことがあります。しかし、離れた場所から冷静に、言葉を選んで投稿してもらうことで、そのようなトラブルを防ぐことができるのです。具体的には、熊本支援チームの現地スタッフから渡辺さんへLINEで文章と写真を送り、それを渡辺さんが読みやすく編集し、誤字脱字も直して投稿してもらうという流れで進めました。

もう一つは、現地スタッフの負担を減らせたことです。日々の支援活動で手一杯の中、SNSやブログの更新は大きな負担になります。そこで情報発信に長けた人に手伝ってもらうことで現地スタッフの負担は減り、より支援活動自体に力を注ぐことができました。「これまで大きな災害が起こった時に、“何か自分にできないか”と考えることはありましたが、実際に動くことはできていませんでした。被災地へ行けるかというと、普段の生活や仕事があるから行けない。お金を寄付できるかというと、そんなに大した金額はできない。そうやって諦めていました。でも、今回初めて東京からリモートで関わって、東京にいても支援できることがあると分かりました。また、コロナ禍で県外から支援に行けなかったことが、リモートチームやクラウドファンディング、現地学生との連携などを生み出すことにつながったと思います。現地に行かなくても、どこにいても、支援したい人が支援できる形を見つけられたことは、今後の災害発生時においてもすごく役に立つはず。新しい時代の災害支援のモデルだと思います」と渡辺さんは話します。

熊本支援チームのホームページ
https://www.kumamoto-team.net/







渡辺春花さんに知り合いに声を掛けてもらい、数名がリモートチームに参加。東京をはじめとした県外からリモートでブログの更新やSNSの投稿をしてくれました

topics

第7回「ジャパン・レジリエンス・アワード（強靱化大賞）」金賞（NPO・市民活動部門）受賞

一般社団法人レジリエンスジャパン推進協議会（本部：東京都、会長：広瀬道明 東京ガス株式会社取締役会長）は、2021年3月18日、都内にて表彰式を開催し、「第7回ジャパン・レジリエンス・アワード（強靭化大賞）」の受賞者を発表。「一般社団法人熊本支援チーム」が金賞（NPO・市民活動部門）を受賞しました。

東日本大震災から熊本地震などのこれまでの災害支援の取り組みに加え、2020年7月熊本豪雨災害において「コロナ禍による新しい災害支援のあり方」として新たな被災地支援の方法や有償スタッフの仕組みを構築、実践した実績が認められ、今回の受賞に至りました。



受賞式にて挨拶する熊本支援チーム代表理事の池田親生

「ジャパン・レジリエンス・アワード（強靱化大賞）」とは

全国で展開されている次世代に向けたレジリエンス社会構築への取り組みを発掘・評価、表彰する制度として2014年11月に創設。強靱な国づくり、地域づくり、人づくり、産業づくりに資する活動、技術開発、製品開発等に取り組んでいる企業・団体の表彰を行っています。

https://www.resilience-jp.biz/award/

topics

キャンプファイヤー クラウドファンディングアワード2020 ソーシャルグッド賞 受賞

有償の学生支援チームをつくるために取り組んだ「キャンプファイヤー クラウドファンディング」（詳しい内容は19-20ページ参照）。たくさんの方々に応援いただいたおかげで、クラウドファンディングアワード2020「ソーシャルグッド賞」に選出されました。ご支援いただいた皆さま、本当にありがとうございました。



「キャンプファイヤー クラウドファンディングアワード2020」とは

特に優れた挑戦を讃えることを目的に、2020年に実施された約13,000件にのぼるクラウドファンディングプロジェクトから「2020年を代表する100プロジェクト」を選出。さらに「支援総額」「支援者数」「影響力」の観点に加え、Twitterによる「一般投票」の結果から総合的に評価し、「総合賞」に加え、4つの「部門賞」と「特別賞」の合計22のプロジェクトを決定。

https://award.camp-fire.jp/2020/

全国から注目集めた熊本支援チームの活動

テレビ

熊本支援チームの活動は多くのメディアで紹介されました。

◆テレビ朝日（全国放送）　2020年8月14日放送　夕方ニュース



熊本市内の大学生・前元盾哉さん(20)は、初めて災害ボランティアに参加しました。ただ、一般的なボランティアとはちょっと違います。

　災害ボランティアに参加した熊本市内の大学2年生・前元盾哉さん：「お金が発生するという形で一日5,000円とお食事券みたいのがついてて…」

　実はこれ、水害とコロナとの“ダブル災害”に対応するため生まれた新たな取り組みなんです。

　一般社団法人「熊本支援チーム」・池田親生代表(38)：「間違いなく県外のボランティアが入れない人手不足…。コロナが怖いなかで、全体的には（復旧が）進んでいないのかなと」

　そこで注目したのが県内にいる夏休み中の大学生です。参加した学生に対し、一日あたり5,000円の支援金、さらに地元飲食店などで使える飲食券1,000円分も提供。資金は、県外の「ボランティアに行きたくても行けない人たち」などからクラウドファンディングを通じて募ります。14日までに集まった寄付は、予想を大幅に超える1,600万円。すでに“150人分の人手”が確保できたといいます。

◆TBS（全国放送）　2020年9月13日放送　Nスタ「現場から！」



◆NHK熊本放送局　2020年8月21日放送　夕方ニュース



◆熊本放送(RKK)　TBS系列　2020年9月1日放送　夕方ニュース



◆テレビ熊本（TKU）　フジテレビ系列　2020年9月9日放送　夕方ニュース



新　聞

毎　日　新　聞

〔第3種郵便物認可〕

熊本支援　三方よし

九州豪雨

CF全国から2000万円
バイト減の学生に日当
被災地復旧にスピード

九州豪雨の被災地・熊本県の被災者支援団体が、県内学生を復旧支援に呼び込もうとインターネット上で資金を募ったところ全国から約2000万円が集まった。寄付を活用して活動に参加する学生に1日当たり6000円を支給する。



土砂の撤去作業をするボランティアら。参加を県内に限定しておりボランティアは不足している＝熊本県球磨村で4日、徳野仁子撮影

被災地では新型コロナウイルスの感染防止のためボランティアを県内在住者に限定しており人手が不足している。一方で新型コロナの影響でアルバイトが減るなどし、ボランティアに参加する余裕がない学生も多い。そうした学生たちに、ボランティアに行きたくても行けない県外の市民をつなぐ取り組みとして注目される。

資金を募ったのは、社団法人「熊本支援チーム（事務局・熊本市東区）」。チームは2011年、熊本県内から東日本大震災の被災地支援のため結成され、16年の熊本地震でもボランティア活動をした。今回も豪雨直後の7月6日から同県人吉市などで泥のかき出しを始めたが、チームの池田親生代表（38）の周辺では、新型コロナの影響でアルバイトが減ったり解雇されたりして、ボランティアに行く経済的余裕がない学生が多くいた。

そこでボランティアは無理でも被災地の復旧活動に参加したい学生に1日当たり5000円の支援金と、被災地で使える1000円分の飲食券を支給しようと、インターネットで寄付を募るクラウドファンディング（CF）を7月25日に開始。8月19日に終了し、目標額（600万円）の3倍以上となる2026万円が3503人から集まった。寄付した県外在住者からは「県外の人が支援に関わる仕組みを作ってくれてありがとう」などの声が寄せられた。

参加者は県内在住の大学生や専門学校生らに限り、平日に計5日以上活動するのが条件。チームのホームページなどで募集している。寄付を活用した復旧活動は既に始まっており、夏休み期間の9月10日までを想定。チームは2000万円で延べ200人を活動できるとしており、人吉市内に設けた活動拠点の整備費などにも充てる。

池田代表は有償での復旧活動に否定的な声が届くことも予想しているが「一刻も早く泥をかき出さないと、腐って住めなくなる家が増える」と意義を語る。

夏休みを利用して人吉市内で浸水した家屋の復旧作業に従事した熊本市の東海大2年、中山魁（かい）さん（20）は「コロナ禍でアルバイトが減り、生活は大変だった。クラウドファンディングは参加への後押しになると思う。住民の男性は「約2週間ボランティアが入らず臭いがすごかった。大変ありがたい」と笑顔を見せた。【吉川雄策】

2020年8月21日
毎日新聞　朝刊

熊　本　日　日　新　聞

新聞定価1カ月　朝刊のみ＝3,080円(税込み)、朝夕刊セット＝3,838円(税込み)　朝刊1部売り＝110円(税込み)

バイト減の学生 復旧に力

県民有志チームが日当、飲食券

「人手不足」解消へ試み

全国からの寄付を元に、県内の災害支援団体が新型コロナ禍でアルバイト収入が減った学生を「有償スタッフ」として雇い、人手不足が課題となっている熊本豪雨の被災者支援活動に参加してもらう取り組みが始まった。学生には日当のほか、参加店で使える飲食券も支給。コロナ禍で売り上げ減に悩む飲食店支援も狙う。"一石三鳥"の試みだ。

取り組みを始めたのは「熊本地震時には物資配布や県外ボランティアの受け入れ拠点の運営など手掛けた。熊本支援チーム」。豪雨の直後に一般社団法人化し、活動を続けている。

支援チーム事務局長は東日本大震災の際、県民有志で設立した「熊本支援チーム」。



有償スタッフとして被災者宅の復旧活動に当たる学生＝17日、球磨村

活動は平日のみ、一定期間の活動で学び、地域づくりに携わる人などは受け付ける。

「泥かき」や「がれき運び」など力仕事が多いため、参加は18歳以上の県内在住者、現地で休業中の人を優先する。

財源は寄付で毎月考え。熊本市の一般社団法人ブリッジクマモトと一般財団法人くまもと未来創造基金の共同基金が、既に200万円を提供。総額1千万円を目指し、他にも募金を呼び掛けている。当面は9月18日までの平日に活動し、1日30～90人程度を見込む。組織委員会（☎080・1767・3744）。

一阿蘇復興への道一の参加も。衛藤優希代表（20）は「コロナで南阿蘇村の復興支援もできない今、何とかしたい」。梁泊（はく）さん（21）は「バイトができなくなった学生に多く参加してもらい、その後も被災者の息長い支援になれば」と話した。

熊本豪雨の復旧支援活動を続ける住民組織などが「副業でみんながつながる熊本・球磨復興プロジェクト」を21日から始める。災害や新型コロナ禍で休業や失業している人を支援しつつ、復旧支援の人手不足を補う狙い。学生と連携する熊本支援チームの取り組み"大人版"で復旧作業に当たる人に1日5千円を支給する。

熊本地震以来、被災者支援の官民連携の場となってきた「火の国会議」などでつくる組織委員会が21日、発表した。

豪雨災害で民間主導の支援活動を続けるコアティング業者を核に新設する「チーム球磨川」が実施主体となり、球磨村と八代市坂本町での活動に参加する人を募る。対象は18歳以上の県内在住者。現地で休業中の人を優先する。

財源は寄付で毎月考え。熊本市の一般社団法人ブリッジクマモトと一般財団法人くまもと未来創造基金の共同基金が、既に200万円を提供。総額1千万円を目指し、他にも募金を呼び掛けている。当面は9月18日までの平日に活動し、1日30～90人程度を見込む。組織委員会（☎080・1767・3744）。

〝大人版〟24日から　休業・失業者ら対象

2020年8月22日
熊本日日新聞　朝刊



熊本県人吉市で、「有償スタッフ」として活動する学生たち＝2020年9月ごろ（一般社団法人熊本支援チーム提供）

熊本県人吉市で、「有償スタッフ」として復旧作業をする学生（左）ら＝2020年8月（一般社団法人熊本支援チーム提供）

復旧ボランティアに日当　人手確保や減収学生支援も

昨年7月の豪雨で被災した熊本県は、新型コロナウイルスの影響で県外からのボランティア受け入れが難しく、復旧作業の担い手が不足した。これを補うため、支援団体が参加者に日当を払う仕組みを導入。過去の災害であまりなかった「有償支援」の背景には、コロナの影響で収入が減った学生や被災者を支える狙いもあった。

「明らかに人手が足りない」。東日本大震災や熊本地震などで支援した熊本市の一般社団法人熊本支援チームの荒木真喜事務局長（38）は、豪雨後の現地で痛感した。

昨年8月から県内在住や帰省中の大学生を「有償スタッフ」として雇用。1日5千円と地元飲食店などで使える飲食券千円分を支給した。通算5日以上参加という条件を付けた。年末までに延べ約700人が人吉市や球磨村で被災家屋の泥出しなどに汗を流した。

熊本県出身の宮崎大4年、鎌山航大さん（23）は豪雨直後からボランティアに従事し、熊本県内に設けた活動拠点の整備などにも充てる。

池田代表は有償での復旧活動に否定的な声が届くことも予想しているが「一刻も早く泥をかき出さないと、腐って住めなくなる家が増える」と意義を語る。

夏休みを利用して人吉市内で浸水した家屋の復旧作業に従事した熊本市の東海大2年、中山魁（かい）さん（20）は「コロナ禍でアルバイトが減り、生活は大変だった。クラウドファンディングは参加への後押しになると思う。住民の男性は「約2週間ボランティアが入らず臭いがすごかった。大変ありがたい」と笑顔を見せた。【吉川雄策】



熊本県人吉市で、「有償スタッフ」として復旧作業をする鎌山航大さん＝2020年8月（一般社団法人熊本支援チーム提供）

2021年夏の全国特集
共同通信社

西　日　本　13版　2020年（令和2年）8月22日（土）　寿月

人手不足の被災地でバイト減の学生雇用

CFで2千万円

熊本の支援団体

豪雨被災地の復旧に携わる人手不足を解消しようと、熊本市の支援団体がクラウドファンディング（CF）を活用して県内の学生を雇用する取り組みを始めた。CFで資金を募ったところ、目標の600万円を大きく上回る約2千万円が全国から集まった。

厳しい暑さとなった17日。土砂にまみれた球磨村神瀬では、一般社団法人「熊本支援チーム」のスタッフが、2階まで水につかった民家の壁をはがしたり、災害ゴミを軽トラックに積み込んだりしていた。汗と泥にまみれて働く14人のうち9人は県内の大学に通う学生たちだ。

学生は同団体と雇用契約を結び、労災保険にも入る。実働6時間で、賃金5千円と千円分の飲食券を受け取る。10日から20日までに延べ120人が参加した。

東海大学3年の野田良多さん（21）は、夏休みを利用して友人5人と参加した。



豪雨による被災地で災害ゴミを運ぶ学生スタッフ＝球磨村神瀬

「ここに来るまでのガソリン代や装備品の購入に費用がかかるので助かる。学生が来やすい」と話す。

熊本支援チームは2011年の東日本大震災を機に発足し、支援金を元に活動。今回の豪雨災害でも発災翌日には現地に入り、人吉市を拠点に民家や旅館の片付け、炊き出しなどをしてきた。新型コロナウイルス感染拡大防止のため県外のボランティアが入れない影響で、被災地は人手不足に直面していた。

「今までとは違う災害支援が必要だ」。荒木真喜代表理事（37）らは、8、9月で長期休みに入る大学生の時間と、現地に入れない県外の人々の思いをCFでつなげようと考えた。新型コロナの影響でアルバイト収入が減った学生の支援もめざした。7月25日からサイトで支援を募ったところ、今月19日の期限までに約2200人から2千万円以上が寄せられた。95％が県外からだった。

今後は12月までに延べ2100人を雇用。片付けが完了した後は、高齢者の見守り活動など中期的な支援につなげていく予定だ。

「学生が継続的に被災地に入る仕組みを作りたい」と荒木さんは話す。学生スタッフ募集の詳細は（http://kumamoto-team.net/recruit）へ。（渡辺七海）

2020年8月22日
朝日新聞　朝刊

私たちが描く未来の姿

これからも日本各地で災害が起こることが予想されます。各地で支援体制が少しでも整うように、災害に強い地域になるように、熊本支援チームが目指す未来と、支援に協力してくださった方々の想いやアドバイスを記します。

私が描く未来

「被災地支援を“仕事”にしてマンパワーを確保、支援者の生活も応援。全国各地に熊本支援チームのような組織を作って“もしも”に備える」

熊本支援チーム 代表理事　**池田 親生**



2020年7月豪雨では、新型コロナウイルスの感染防止のためボランティアが県内在住者に限定されました。私は発災直後に現地に入りましたが、どう考えても復旧にマンパワーが必要な状況でした。そこで考えたのが「有償ボランティア」です。ボランティアに行きたくても行けないと話す県外の方が多くいる一方で、新型コロナの影響でアルバイトが減ったり、解雇されて経済的に余裕がない学生たちの声を間近で耳にしていたことから、寄付金を支援金や飲食券代に活用する仕組みを作りました。

有償に否定的な声があるかもしれないとは思いましたが、被災地での復旧はスピードが求められます。無償でも有償でも、一人でも多くの人を集めて、とにかく被災地の手助けをすることがベストだと、私は判断しました。

これは個人だけでなく、企業に対しても同じことが言えると思います。自社の社員を無償で被災地へ送り出してくれる企業が、経営的に余裕があるとは限らないのです。募った資金をもとに被災地支援を“仕事”にするシステムや組織が成熟していくことが望ましいのではないでしょうか。

また、熊本支援チームのような組織を全国各地に作って“もしも”に備えることも必要だと考えています。



私が描く未来

「いつか来るであろう災害のことは常に考えています。その時のために、和歌山支援チームを立ち上げました」

和歌山支援チーム 代表　**谷 正義さん**



2021年4月に「和歌山支援チーム」を発足しました。私が暮らす和歌山県は、南海トラフ巨大地震による津波が発生した場合に、甚大な被害を受けることが想定されている地域です。毎年のように全国各地で起きている天災は他人ごとではありません。普段は介護や介助を必要とする人向けの施設を運営していることもあり、“その日”が来た時のことは常に考えていました。

しかし、何をすればよいかが分かりませんでした。そんな中、熊本支援チームの存在を知り、民間の団体でも地域を巻き込んで活動をしていることに驚き、率直にすごいと思いました。そして「和歌山にもこんな団体が必要だ」と強く感じ、チームの立ち上げを決めました。

現在のチーム構成はコアメンバー7名、スタッフ31名。メンバーの中には防災士の資格を持つ子どももいます。今はまだ具体的にどう動いていくのかを考えている段階ですが、熊本支援チームのノウハウを学びながら芯のある組織を作っていきたいと思っています。そのための一歩として、新しい形の障害者支援施設を2022年4月に開設予定です。有事の際には災害支援の拠点として一般に開放できる間取りにしてあり、備蓄倉庫として使えるスペースも取ってあります。この場所が、災害に負けない強いまちづくりのベースになれたらと思っています。

池田と谷さんが出会ったきっかけは市民活動

熊本支援チーム代表理事の池田は、竹あかり演出家・プロデューサーとして全国各地で竹あかりの魅力を伝えています。和歌山で地域住民参加型の竹あかりイベントを開催した際に、参加していたのが谷さんです。交流するうちに熊本支援チームの存在を知り、谷さんは自身が暮らす地域のために同じような団体を立ち上げることを決意しました。

私たちが描く未来の姿

私が描く未来 「地方自治体と、NPOや企業といった団体の間であらかじめ協定を結び、有事の際のお互いの動きを決めておけば活動がスムーズになるはず」

TSP 太陽株式会社
代表取締役社長
能村 祐己さん

※TSP太陽株式会社と連携した支援活動については25ページで紹介



スピーディーな災害支援活動には、あらゆる連携が必要不可欠です。例えば、私たち「TSP太陽株式会社」と各協力会社の連携もその一つ。阪神淡路大震災を起点に会社を挙げて何度となく災害支援活動を行い、その度に発電機や仮設トイレなどの外注先企業から協力を受けてきました。この積み重ねで築いた事業者間の連携があったから、2020年豪雨災害で素早く動くことができました。その一方で、行政と民間の連携にはまだ課題が残っていると感じました。災害が起きると、その土地の行政の内部で混乱が発生するので、いざ行政と民間の連携を取ろうとしても、すぐには上手くいかないのです。ですから、地方自治体と、NPOや企業といった団体の間であらかじめ協定を結んでおき、有事の際のお互いの動きを決めておいてはどうでしょう。そうすれば、いざという時に皆がいち早く動けるので、できることの規模が広がり、つまりは助かる方も増えるはずです。今、急がれるのは、新型コロナのような感染症対策を念頭に、ボランティア受け入れのためのルールや段取りを決めておくこと。災害はいつ来るか分からないのですから、その時々の状況に合わせた準備をし続けることが大切なのです。

私が描く未来 「さまざまなプロと協力しながら被災地に最後まで寄り添える“セミプロのボランティア団体”として成長を」

一級建築士
水上（ふみのり） 文藝さん

※水上さんと連携した支援活動については26ページで紹介



被災地の復旧・復興において、これから大切になるのは、支援に長く携わっていける人と、それを可能にするシステムづくりです。というのも、支援活動にはいくつかのフェーズがあります。まずは建築物のようなハード部分の復旧段階で、それから被災者の心や生活といったソフト部分の支援段階へ移っていきます。熊本支援チームには、このソフトの部分にも引き続き寄り添っていく団体になってほしいと期待しています。単なるボランティアで「無償・無料・無責任」というのではなく、無償であってもセミプロみたいな立場を保ちながら、さまざまなプロと協力しながら被災地に最後まで寄り添えるセミプロのボランティア団体です。とはいえ、長く携わるためには、チームのメンバーがそれだけで食べていける仕組みが必要になります。そこで重要になるのが、きちんと報酬を受け取れるシステムづくり。今回取り組んだクラウドファンディングは、その問題に一石を投じたと思います。今後、1年後、10年後、50年後に被災者がどういう生活をできるかということを考えて、さまざまな分野の専門家や企業とコラボレーションしながら、活動のクオリティを高め、情報を集め、活動を長く維持できる、新しい組織の作り方を検討してください。それを実現できる素地が、熊本支援チームにはあります。

私が描く未来 「熊本支援チームが、社会貢献への意識を持った若者を育む場に。そして、やる気のある若者を応援するチームであり続けたい」

熊本支援チーム
代表理事・事務局長
野口 修一



私は2011年の熊本支援チーム発足時（当時の団体名は東日本大震災・熊本支援チーム）から事務局の役割を担ってきました。東日本大震災では支援する側として、熊本地震では支援を行う一方、支援を受け入れる側としても活動。それらの経験を参考に、2020年7月熊本豪雨災害では、より被災地に寄り添った支援活動ができたと感じています。

チーム発足から今年で11年。その間、多くの若者たちが関わってくれました。そして私は「社会貢献への意識を持った若者たちが育つ場になれたら」との想いで彼らをサポートしてきました。だからこそ「○○をやりたい」と若者が希望した時には、それが人助けになるのであれば、できるだけやらせてあげたいと思っています。責任は私たち大人が取ればいい。やる気やアイデアを尊重することが、未来の災害支援に携わる人材の育成につながるはずです。

本誌を見て「災害支援に参加してみたい！」と思ってもらえたら嬉しいですね。熊本支援チームが民間の災害支援団体のお手本的な存在になり、世界中に活動内容を伝えていくことで支援の輪や興味を持つ人が広がっていくことを期待します。

私が描く未来 「全国各地の仲間と繋がり、有事の際の信頼ネットワークを築いていく」

熊本支援チーム
代表理事・事務局長
荒木 真吾



2011年3月の東日本大震災を契機に立ち上げた「熊本支援チーム」。これまで「熊本地震」「熊本豪雨災害」と地元が被災地となった災害に、民間災害支援の団体として、地元密着の支援活動を展開してきました。

日本で多発する地震や水害をはじめとした災害支援のあり方を考え、地元の民間支援チームだからできる強みを活かし、活動してきました。全国各地の地域リーダーやまちづくりリーダーなどの仲間とつながることで、有事の際にスピーディーに支援できる体制と信頼をつくるとともに、全国の民間の災害支援のネットワークをつくっていければと思います。

今回、コロナ禍における大規模災害を経験し、新しい災害支援のあり方を考えさせられた活動でした。そこで、私たちの活動が、今後日本のどこかで起こる災害支援の一つの参考になればと思い、報告書をまとめました。

災害は、いつ、どこでもやってきます。そのために、日頃からの仲間との繋がりを大切にしていきたいと思います。

講演依頼・スタディーツアーについて

2016年「熊本地震」、2020年「熊本豪雨災害」の経験をもとにした民間支援活動、体験談など「伝える」活動・講演を行っています。

また、被災地・熊本の現地にお越し頂き「熊本の今を伝える」スタディーツアーの受け入れも行います。お気軽にお問い合わせください。

E-mail：office@kumamoto-team.net

活動支援金募集

熊本支援チームへのご支援を受け付けております。

皆様から頂きました支援金や物資は、当団体の活動、被災者への支援活動費に充てさせて頂きます。また、今後日本各地で発生する災害での現地支援活動にも活用させて頂きます。

ゆうちょ銀行

店名：七一八（ナナイチハチ店）
普通　3949541
一般社団法人熊本支援チーム

熊本銀行

健軍支店
普通　3200601
一般社団法人熊本支援チーム

肥後銀行

健軍支店
普通　1896995
一般社団法人熊本支援チーム

熊本信用金庫

健軍支店
普通　0288919
一般社団法人熊本支援チーム

本誌は、一般社団法人熊本支援チームが取り組んだ、
コロナ禍における災害支援の新しいカタチを記録し、
「経験知」として広く伝えることを目的としています。

熊本支援チームは2011年3月の東日本大震災を契機に
熊本県内の有志メンバーにより任意団体として発足。
熊本および全国の災害支援への持続可能な体制づくりを目的に
2020年7月13日、一般社団法人化しました。

2016年4月の熊本地震では、支援チームも最大震度7を2度経験。
被災しながらも、行政や国の支援が行われる前、本震発生1時間後から
熊本市東区健軍を拠点ベースに、被害が甚大だった隣接の益城町を中心に
精力的な民間支援活動を展開しました。

2020年7月の熊本豪雨災害でも、発災の翌日から被災地での支援活動を展開しています。
しかしながら、新型コロナウイルス感染症の影響から
従来とは異なる災害支援のあり方が求められました。

そこで私たちは、これまで培ってきた災害支援の経験や県内外の人脈、アイデアを駆使し、
試行錯誤しながら「コロナ禍における新しい災害支援のカタチ」づくりに挑戦。
独自の支援システムを確立し、被災地復旧の一助になることができたと考えています。
そして、この経験知は、これから起こりうる災害の被災地支援においても
きっと役に立つと信じ、記録として残すべく本誌を制作しました。
ぜひ多くの方々にご覧いただければと思います。

最後になりましたが、私たちの想いや活動に共感し、物資・支援金・応援・お手伝いなど
さまざまな形でご協力いただいた全国の皆様に心より御礼申し上げます。
本当にありがとうございました。
ご支援いただいた皆様も、私たちと同じ“チーム”、
そして“想い（OMOI）”も同じだと信じています。
これからもご支援・ご協力いただきますよう、どうぞよろしくお願いいたします。

一般社団法人 熊本支援チーム

最後に

私たちはあきらめない。
震災から立ち直ろうとしている最中　また　大きな災害。
家が泥まみれになり まちに瓦礫が流れ込み コロナで人が寄れない。
それでも 私たちは復旧をあきらめない。このまちが 好きだから。
好きなまちの為に 汗もかきます。頭も使います。
自分達でできる事は自分達でやります。
それでも 足りないものの大きさに 目を背けたくなる時があります。
それを補う力を 貸してほしいです。

そう訴えながら 私たちは2020年7月熊本豪雨災害の支援活動を行いました。
たくさんの団体・個人の方々に力を貸していただき
被災地での支援活動を継続することができました。
コロナ禍における新しい災害支援のカタチを生み出すこともできました。
この場を借りて ご支援いただいた皆さんに心より御礼申し上げます。
ありがとうございます。

記録誌が 皆さんの地域での活動に
または皆さんそれぞれのこれからの活動においての
何かしらのヒントや気付きになれば幸いです。

災害に強いまちづくり、地域づくり、人づくりを目指して
ともに歩んでいきましょう。

